
好きなもの

椎音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好きなもの

【Nコード】
N2798J

【作者名】
椎音

【あらすじ】
ある夏の日、男と女。
多少グロイ表現を含みます。

（前書き）

この小説には多少グロイ表現を含みます。
苦手な方はすぐにお戻り下さい。

「食べたい」

くだらない話をして少しの沈黙の後、彼は私の方を見て言った。

「……いる？」

食べかけの棒アイス差し出して見たが、丁重に断られた。

じゃあ何なんだ。

「何か食べたいもんでもあんの？」

「うん」

「何？」

「お前」

昼間からお盛んですこと。

半ば呆れながら彼を見る。

冗談ではないらしい。

「嫌だ」

溶けかけたアイスを口の中に入れて、棒だけ引き抜く。

その棒を、入っていた袋に入れてから私は立ち上がった。

「こんな暑い中することじゃない」 上から言っただけで驚いた顔した上目遣いの愛しの彼氏が見える。

何だよ。

「しないよ」

「は？」

間抜けな声が自然に出た。

驚いたのはこっちの方だ。

「じゃあどうということなの？」

そう言っただけで彼は満面の笑みで言った。

「お前のその腕や内蔵とかを食べたい」

悪い冗談だと思った。

今この人は何て言った？

腕を、内蔵を、食べる？

「何、言ってるの？」

そう言った声は恐怖で掠れていた。

彼は何を言うでもなく、突然私の腕を引っ張った。

私はそれを止める事も出来ずに彼の腕の中に入ってしまった。

「ちよつと、」

文句を言おうと顔を上げた瞬間に、腕を捕まれた。

「旨そう」 うつとりとしたその声に寒気がした。

「嘘だよね？」

心臓がバクバクと高鳴る。

「ねえ、」

息が乱れる。

「嘘って言つてよ！」

私の大きな声が響いたかと思うと、すぐ沈黙が現れた。

しかしその沈黙は彼の笑い声によって破られた。

「あはははは！」

私は腹を抱えて笑う彼を呆然と見る事しか出来なかった。

何々、どういう事？

「本当面白いな、お前」

彼はあー可笑しい、何て言いながら目に溜まった涙を拭いた。

流石に笑いすぎだと思っただけ。

「えっじゃあ今までの嘘なわけ？」

「嘘だよ」

あっけらかんと答えやがった。

ちくしょう覚えてろ。

「なんだ、びっくりした」

私は安堵して飲みかけのジュースを一気に飲み干した。（アイス

食べながら飲むとお腹壊すよとか言われたけど無視した。）

「まったく、驚かさないでよ」

そう言つと彼は呑気に笑つて返してきた。

ムカついたから今度彼のご飯にワサビをいっぱい入れてやろう。
と、考えたところで私の意識は途切れた。

「ごめんね、嘔吐いて」

次の日、俺が会社に着くと隣のデスクの小野が声を掛けてきた。

「どうした？ 嬉しそうな顔してんじゃん」

「そう？」

小野は朝飯を食い忘れたのか、携帯食料を食べながら話を続けた。

「何かあったのか？」

‘これ’か？と聞きながら小指を立てている小野に苦笑しつつ、
俺は答えた。

「久々に美味しい肉を食べたんだ」

｝ f i n ｝

（後書き）

自分のサイトに載せてた物を載せました。
初投稿がこんな短くてすいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2798j/>

好きなもの

2011年1月19日10時32分発行